

小規模・高齢化する 集落の将来を考える

ヒント集



平成 24 年 3 月

国土交通省
国土政策局

長期的な展望を踏まえた集落の
多様な生活・コミュニティ確保方策に
関する調査委員会

小規模・高齢化する集落の将来を考えるヒント集

目次

はじめに

- | | |
|-------------|---|
| 1. ヒント集のねらい | 1 |
| 2. ヒント集の構成 | 1 |

第1部 集落を取り巻く状況について考えてみよう

- | | |
|----------------------------------|----|
| 1. まずは自らの集落を診断してみよう | 2 |
| 2. 集落の状況が厳しくなっていく過程 | 4 |
| (参考) 集落を取り巻く全国的な状況 | 6 |
| 3. 集落の将来について考えるヒント | 8 |
| ステップ① 日頃からの話し合いを大切にし、集落の現状を把握しよう | 9 |
| ステップ② 集落の望ましい将来像を描いてみよう | 10 |
| ステップ③ コミュニティの維持・活性化に取り組んでみよう | 11 |

第2部 暮らしの安心を支える「集落のかたち」について考えてみよう

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 集落の再生・再編の取組方法 | 12 |
| 2. 集落の再生・再編を考えるヒント | 14 |
| パターン①-1 集落間の相互扶助 | 14 |
| パターン①-2 新たな広域的組織づくり | 15 |
| パターン② 行政区等の再編 | 16 |
| パターン③ 集落の移転 | 18 |

このヒント集は、平成23年度に国土交通省国土政策局において実施した「長期的な展望を踏まえた集落の多様な生活・コミュニティ確保方策に関する調査」において、有識者からなる調査委員会を設置し、検討を行った成果をとりまとめたものです。

(委員会委員)

- | | |
|--------|----------------------|
| 一ノ瀬 友博 | 慶應義塾大学環境情報学部准教授 |
| ○奥野 信宏 | 中京大学総合政策学部教授 |
| 釜瀬 隆司 | 江津市産業振興部長 |
| 作野 広和 | 島根大学教育学部准教授 |
| 澤田 雅浩 | 長岡造形大学建築・環境デザイン学科准教授 |
| 三上 亨 | 青森公立大学地域みらい学科講師 |

(敬称略、五十音順、○印は委員長)

はじめに

1 ヒント集のねらい

全国各地の自然や風土に根差し、多様な地域文化を育んできた集落[※]においては、人口減少や高齢化により、従来からのコミュニティ機能が低下し、維持・存続が危ぶまれる状況が拡大しています。

集落における暮らしの安心を支えてきたコミュニティの維持・活性化が求められる一方、小規模・高齢化する多くの集落では、担い手の不足をはじめ、従来の集落の枠組みでは対応できない課題に直面しています。

コミュニティの維持・活性化を図る上では、住民自ら集落の現状を把握し、集落の将来について認識を共有することが大切です。しかし、従来の集落の枠組みでは取組みが困難な場合には、これにこだわらず、暮らしの安心を支えるための一つの手段として、新たな「集落のかたち」を考え、再生・再編に取り組むことが考えられます。

このヒント集では、地域の実情に応じた適切な「集落のかたち」について考える「きっかけ」となるよう、入門編として具体的な事例での参考となる取組みなどについて紹介しています。

小規模・高齢化により将来に不安を抱える集落において、コミュニティの維持・活性化に取り組もうとされる集落の関係者のみなさま、地方自治体のみなさまの活動の参考にさせていただくことを期待します。

2 ヒント集の構成

第1部 集落を取り巻く状況について考えてみよう

1. まずは自らの集落を診断してみよう
2. 集落の状況が厳しくなっていく過程
3. 集落の将来について考えるヒント



第2部 暮らしの安心を支える「集落のかたち」について考えてみよう

1. 集落の再生・再編の取組方法
2. 集落の再生・再編を考えるヒント

※ このヒント集では、集落を「従来からの住民同士の共同活動等を担う小規模のコミュニティのまとまり」とイメージしています。

第1部 集落を取り巻く状況について考えてみよう

1 まずは自らの集落を診断してみよう

- ・みなさんは、集落の状況や課題について考えてみたことはありますか？
- ・まずは、以下のチェックシートに基づいて、診断してみてください。

【チェックシート】 集落の状況や近年の変化に該当する項目に☑を記入してみよう。

① 集落の人材

- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 1. 集落の人口が大幅に減少している。 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 後継者の不足など、集落の将来について不安が増している。 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 集落のリーダーとなる人材が減少している。 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 集落を支援してくれる外部の組織や人材とのつながりが広がらない。 | <input type="checkbox"/> |
| 「☑」の数 合計 | <input type="checkbox"/> |

② 集落の生活利便性

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 1. 役場や小中学校など、公的なサービスを受けるのが不便になってきている。 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 病院や診療所に通うのが不便になってきている。 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 食品や日用品の買い物が不便になってきている。 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 外出する際の交通手段（バス、電車など）が不便になってきている。 | <input type="checkbox"/> |
| 「☑」の数 合計 | <input type="checkbox"/> |

③ 集落の生業

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 1. 農林漁業など地域の中心となる産業を続けていくことが難しくなっている。 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 集落やその周辺で、若者の働く場所が減少している。 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 高齢者や女性が参加できる特産品づくりなどの新しい活動が広がらない。 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 地域の資源を活かした観光など、地域外との交流が広がらない。 | <input type="checkbox"/> |
| 「☑」の数 合計 | <input type="checkbox"/> |

④ 集落の環境

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 空き家が増加している。 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 耕作放棄地や荒れた山林が増加している。 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 集落の景観が悪化している。 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 自然災害の被害を受ける危険性が拡大している。 | <input type="checkbox"/> |
| 「☑」の数 合計 | <input type="checkbox"/> |

⑤ 集落のつながり

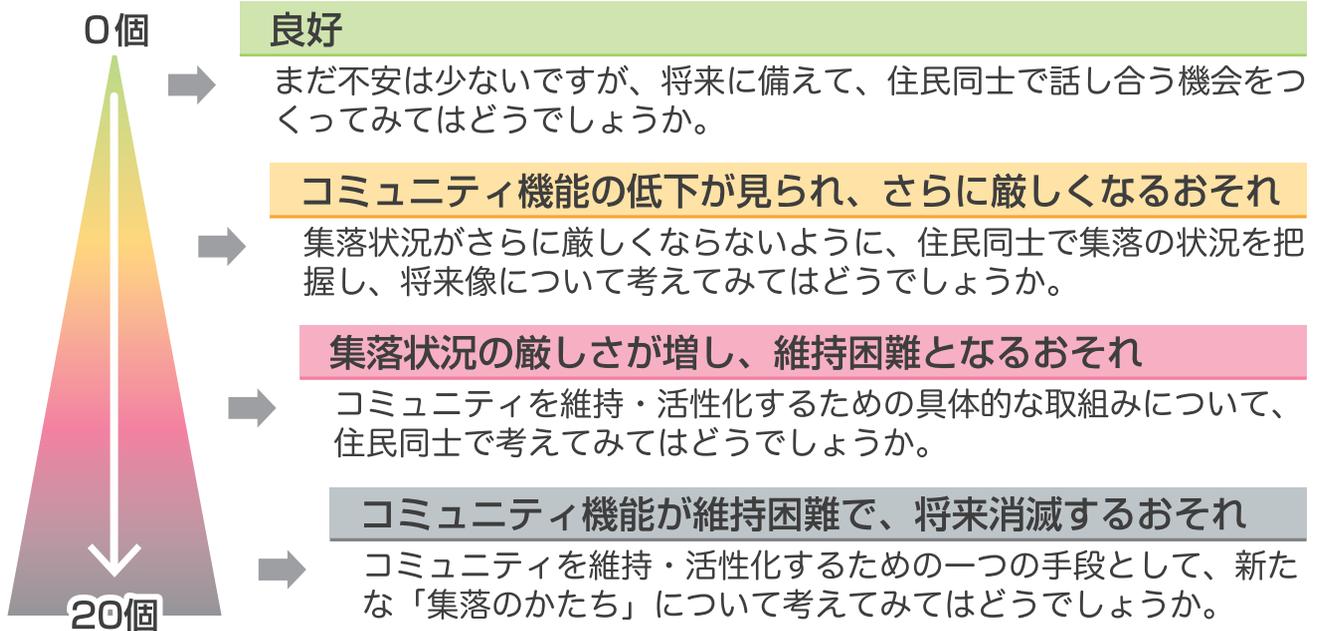
- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 1. 住民が集まって話し合う機会が減少している。 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 道路や水路などを、住民が共同で利用・管理することが難しくなっている。 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 祭りや冠婚葬祭などを、住民が協力して行うことが難しくなっている。 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 多くの住民の間で集落の将来への希望が薄れ、閉そく感が広がっている。 | <input type="checkbox"/> |
| 「☑」の数 合計 | <input type="checkbox"/> |

<診断>

■ 該当項目数の合計（の数の合計）

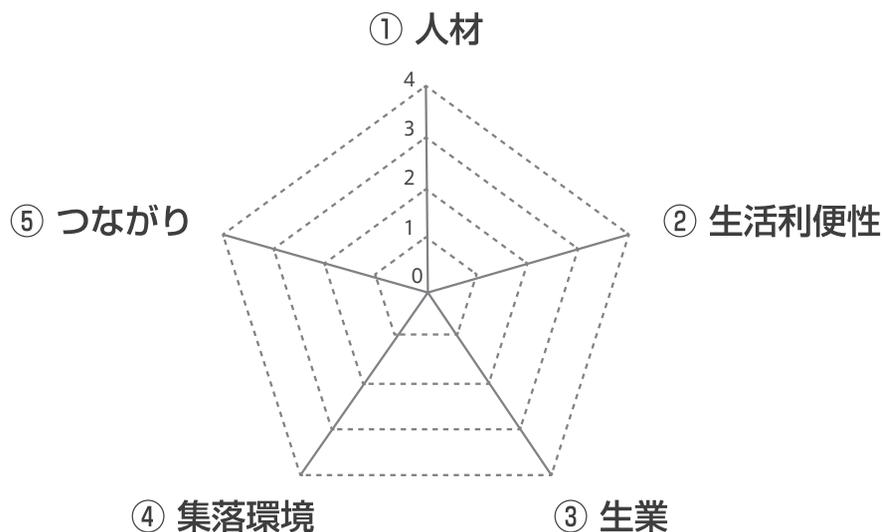
個

※集落の状況を診断する一つの目安と考えて下さい。



■ 分野別の該当項目数

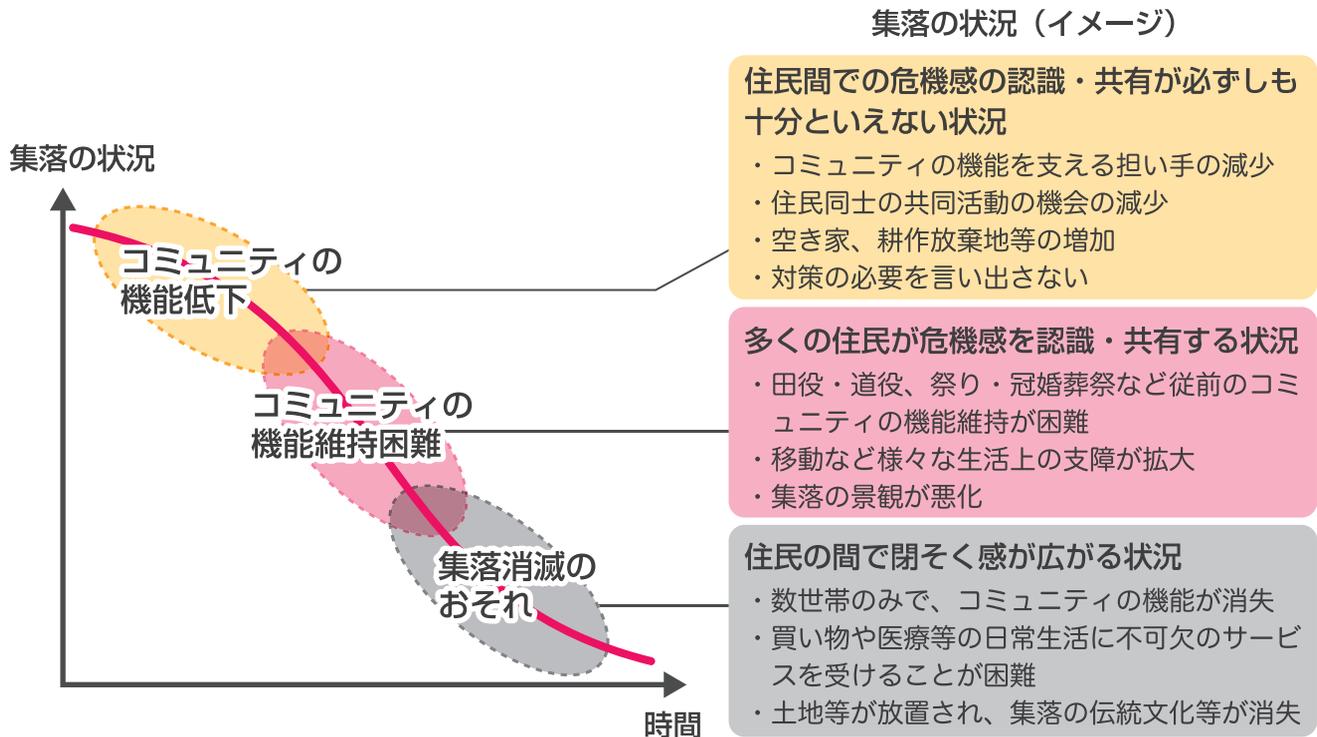
※該当項目数の多い分野が、集落の弱い部分だと考えられます。



2 集落の状況が厳しくなっていく過程

気づかないうちに、集落の状況は徐々に厳しくなっていきます

■ 集落の状況が厳しくなっていく過程



住民の方々からは早い段階からの取組みが重要との声が聞かれます



まさか、この10年、20年のうちに人口がここまで減るとは思ってもみませんでした。
道路の草刈りを住民全員でやっていますが、とても大変です。



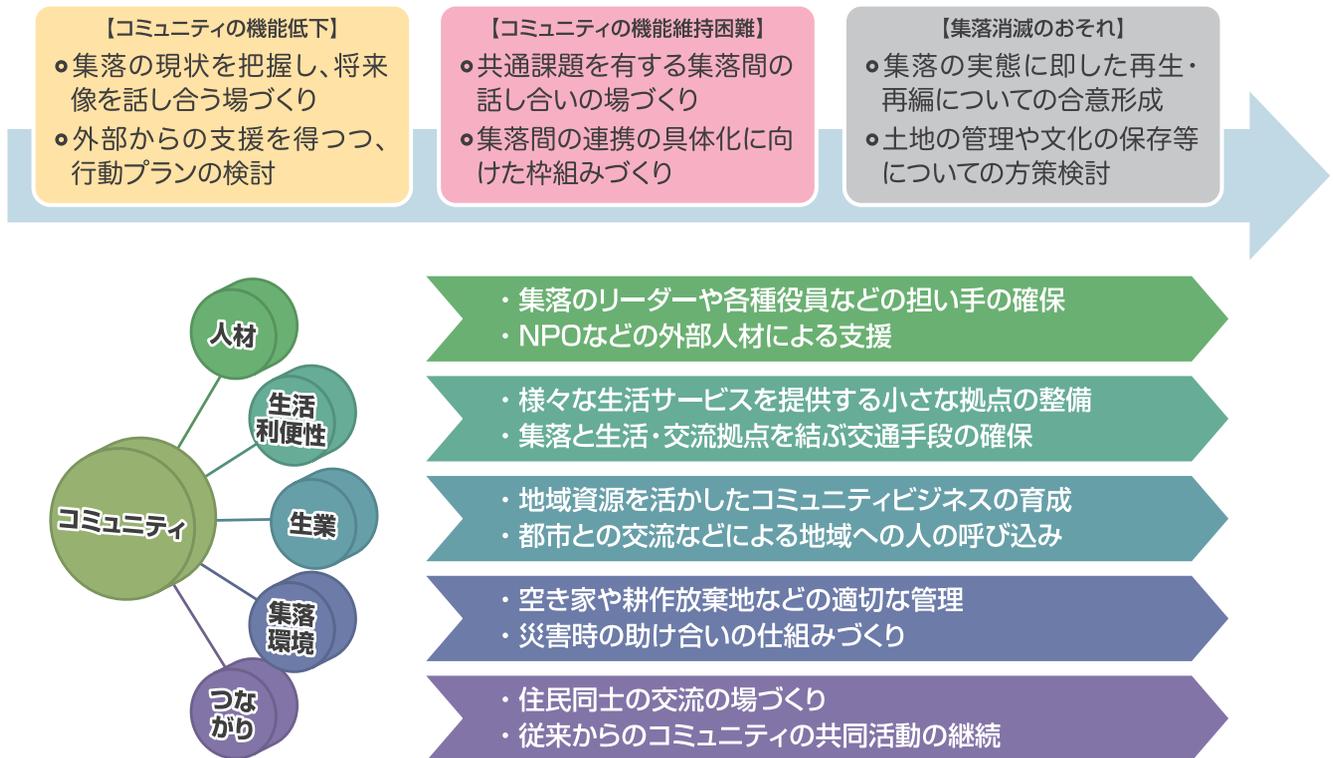
集落に50～60歳代の人がいるうちに、集落で話し合いの場を作っていれば、集落の活性化策を見い出して取り組めたかもしれません。
共有林や個人の山林について、管理や権利移転ができておらず、所有者に話しに行くのも大変です。



以前は自分で車を運転して病院やスーパーマーケットに通っていましたが、歳をとってきたため、最近はバスで通っています。
最近、そのスーパーマーケットが閉店してしまったため、日々の生活の不安が広がっています。

集落の状況が厳しくなっていく中で、コミュニティを支える分野ごとにみても、様々な課題が生じます

■ 集落の状況が厳しくなる過程での主な課題とコミュニティを支える5つの分野別の対策の例



集落の状況が厳しくなっていく過程で、様々なものが失われていきます

■ 集落の状況が厳しくなっていく過程で失われていくもの

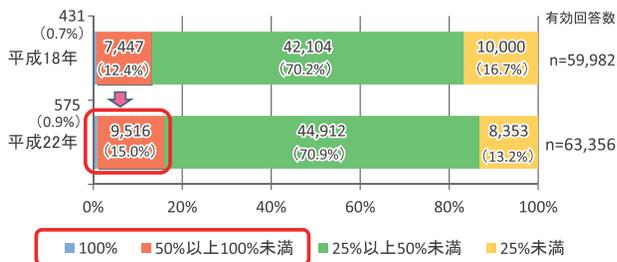
住民の気力 (心の過疎)	<ul style="list-style-type: none"> 地域産業の低迷や生活利便性の低下、それに伴う人口減少・高齢化等により、集落の共同活動への参加意欲、定住意欲が低下
共同活動	<ul style="list-style-type: none"> 農林漁業等に関する共同作業、祭り・伝統芸能、冠婚葬祭、運動会や旅行会、草刈りや道普請等が行われなくなる
自治組織	<ul style="list-style-type: none"> 区長等の担い手がいなくなり、無住化の前に解散することもある
住民(無住化)	<ul style="list-style-type: none"> 集落に住む人がいなくなる
集落空間の管理	<ul style="list-style-type: none"> 家屋や田畑、山林、墓地等の所有権が残り、管理を続ける必要が残る 道路や水路等についても、利用者が減り、管理のあり方が問題となる
仲間への思い、 仲間意識	<ul style="list-style-type: none"> 集落を離れても、集落への思いや住民同士の仲間意識を持ち続けていくが、コミュニケーションや集落との関わりが減っていき、徐々に希薄化
集落の歴史文化、 記憶	<ul style="list-style-type: none"> 集落の断片的な歴史は史料として残される可能性はあるが、生活の様子や風習、言い伝え等は記録に残しにくく、消滅するおそれ

(参考) 集落を取り巻く全国的な状況

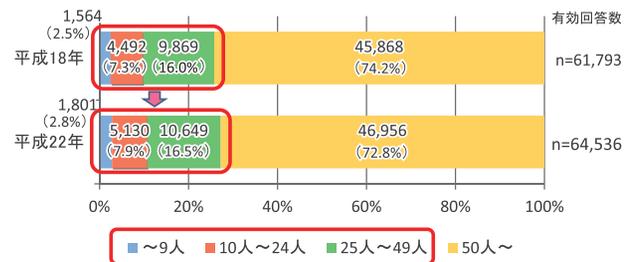
集落の小規模・高齢化が進んでいます

- 全国の過疎地域等にある約 65,000 の集落のうち、約 16%にあたる約 10,000 の集落では、高齢者(65歳以上)が過半を占めており、その割合は年々増加しています。
- 人口規模でも、50人未満の集落は約3割に及び、小規模な集落の割合が増加しています。

■ 集落の高齢化の状況



■ 集落の人口規模の状況



資料：「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」(平成23年3月、総務省・国土交通省)をもとに作成

コミュニティ機能が低下し、様々な問題が広がっています

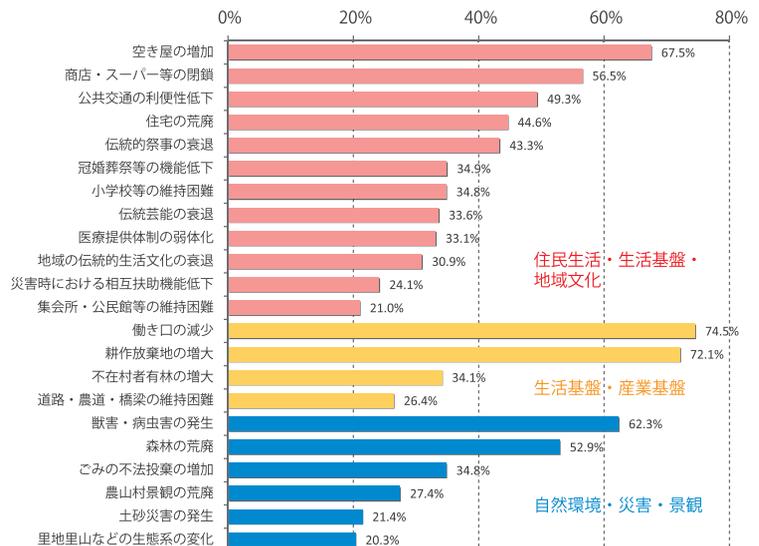
- 小規模・高齢化が進むにつれ、集落での生活や生産活動、さらには、従来から行われてきたコミュニティの共同活動の継続が困難となってきています。
- 具体的には、生活面では、空き家の増加、商店の閉鎖、公共交通の利便性低下、生産面では、働き口の減少、耕作放棄地の増加、環境面では、獣害の発生、森林の荒廃といった問題が生じています。

■ コミュニティ機能の低下の状況

		平成22年 集落の状況			
		良好	機能低下	維持困難	総計
平成18年 集落の状況	良好	48,740 (97.0%)	1,354 (2.7%)	131 (0.3%)	50,225 (100.0%)
	機能低下	430 (8.2%)	4,628 (87.8%)	216 (4.1%)	5,274 (100.0%)
	維持困難	162 (6.0%)	244 (9.1%)	2,281 (84.9%)	2,687 (100.0%)
	総計	49,332 (84.8%)	6,226 (10.7%)	2,628 (4.5%)	58,186 (100.0%)

平成18年から平成22年にかけて、集落の状況が厳しくなっている集落が約1,700ある

■ 集落で発生している課題

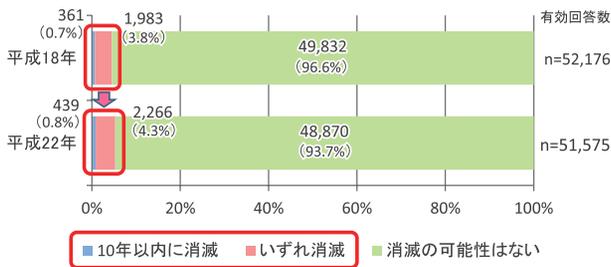


資料：「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」(平成23年3月、総務省・国土交通省)をもとに作成

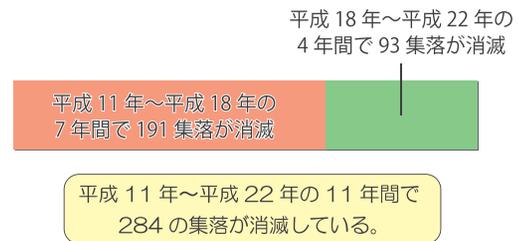
集落が消滅するおそれも拡大しています

- 「10年以内に消滅のおそれがある」とされる集落は全国に400以上あり、「いずれ消滅するおそれがある」とされる集落も約2,300あります。
- 実際、平成11年から平成22年までの11年間で約300の集落が消滅しています。現在人が居住している地域が、今後さらに無居住化していくと考えられています。

■ 消滅のおそれがある集落の割合



■ 消滅した集落の数

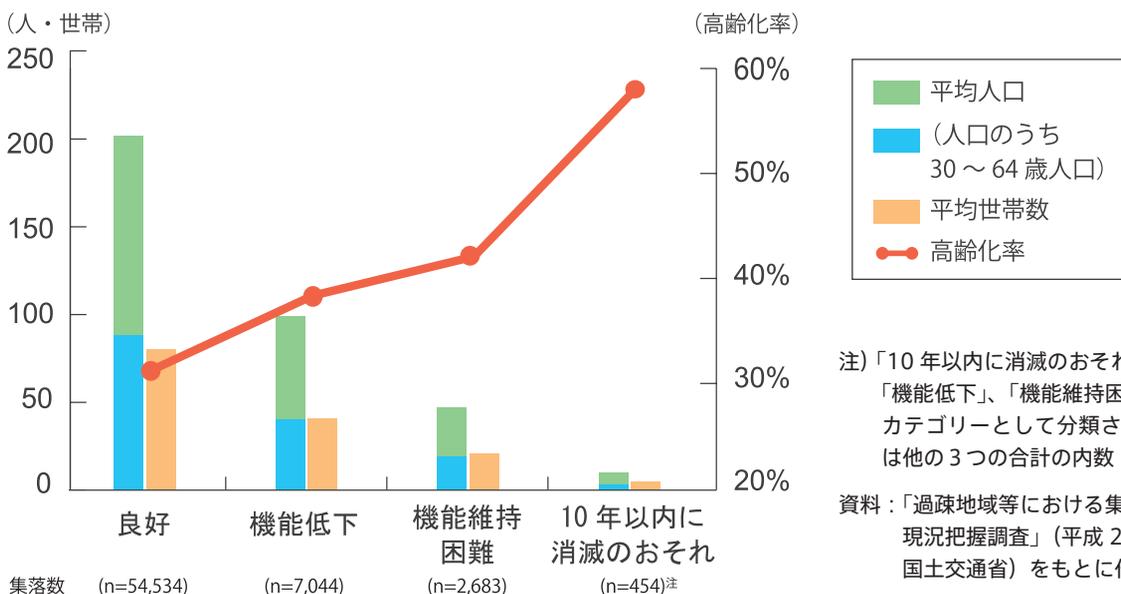


資料：「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」（平成23年3月、総務省・国土交通省）をもとに作成

小規模・高齢化に伴って集落の状況が厳しくなる傾向がみられます

- 集落の状況ごとに人口（全国平均）をみると、「良好」集落（約200人）に比べ、「機能低下」集落では1/2（約100人）、「機能維持困難」集落では1/4（約50人）、「10年以内に消滅のおそれ」集落では1/20（約10人）となっています。
- 高齢化率（全国平均）については、「良好」集落（約30%）に比べ、「機能低下」集落では約37%、「機能維持困難」集落では約42%、「10年以内に消滅のおそれ」集落では約60%と高くなっています。
- ただし、地域や集落の立地条件によって状況は異なります。

■ 集落の状況と人口・高齢化の状況



注）「10年以内に消滅のおそれ」集落は、「良好」、「機能低下」、「機能維持困難」集落とは別のカテゴリーとして分類されており、その数は他の3つの合計の内数

資料：「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」（平成23年3月、総務省・国土交通省）をもとに作成

3 集落の将来について考えるヒント

- 集落の状況は徐々に厳しくなっています。日々の生活の中でその兆候に気づかず、また、気にはなってもなかなか口に出すことがはばかられたり、具体的な取組みに結びつかず、問題が先送りされる傾向にあります。
- 気づいた時に「もっと前に何か手を打っておけばよかった」と後悔することのないよう、住民同士で集落が直面する問題に向き合い、思いを共有することが大切です。

集落生活の不安を日ごろから話し合う機会がありますか？

はい

いいえ

ステップ① 日頃からの話し合いを大切にし、 集落の現状を把握しよう

- ヒント1 住民同士が顔を合わせる交流の場を設ける
- ヒント2 集落が抱える現実の問題を直視する



花見を兼ねて、今後の集落活動について話し合おうと呼びかけたところ、多くの住民が集まり、意見交換ができました。



集落の将来の具体的なイメージを共有できていますか？

はい

いいえ

ステップ② 集落の望ましい将来像を描いてみよう

- ヒント1 将来の希望を自由に話し合う雰囲気づくり
- ヒント2 集落の資源を確認する
- ヒント3 高齢者から子ども、女性まで幅広い住民の意見を聞く



集落の将来について話し合う際、「言い出した人に責任を押し付けない」と決めると、様々なアイデアが出されました。



集落の維持・活性化に実際に取り組んでいますか？

いいえ

ステップ③ コミュニティの維持・活性化に取り組んでみよう

- ヒント1 住民が主体となって取り組む雰囲気づくり
- ヒント2 集落生活の維持・改善を図る
- ヒント3 地域資源を活用して集落の活性化に取り組む
- ヒント4 集落活動をサポートしてくれる仲間を広げたり、資金を調達する



取組みのアイデアについて誰が実施すべきかを考えてもらうことで、「まずは住民で頑張ってみて、無理なことは行政に依頼しよう」という雰囲気になりました。



ステップ① 日頃からの話し合いを大切に、集落の現状を把握しよう

ポイント

- 集落での生活について、普段から不安や希望を気軽に話し合える機会を広げることが、集落の課題を住民同士で共有し、集落に対する愛着を再認識する第一歩となります。
- 日々の生活では集落状況が厳しくなっていくことになかなか気づきません。みんなで自らの集落の現状を調べたり、他の集落と比較しながら、危機感や将来の可能性を共有することが重要です。

ヒント1 住民同士が顔を合わせる交流の場を設ける

- ▶ 高齢化や共同活動の減少により、住民同士が顔を合わせる機会が少なくなっていたので、花見を兼ねて、集落についての意見を聞いてみました。多くの住民が集まり、今後の集落活動について意見交換ができたほか、みんなで食事や会話をする楽しみを見い出すことができました。
- ▶ 自治会の会合では、世帯主である男性が参加し、報告・質疑がなされるだけなので、女性や若者など幅広い住民の参加を促し、お互いに思いを話し合えるワークショップを開催してみました。

ヒント2 集落が抱える現実の問題を直視する

- ▶ 住民が徐々に転出していても、あまり問題視されていませんでした。そこで、大きな地図を広げ、住民の手で空き家や耕作放棄地を色塗りしたところ、集落の深刻さを感じ取り、何とかしようという思いが沸き立ちました。
- ▶ 各世帯の10年、20年後について話し合ってもらい、足し合わせることで集落全体の人口と年齢構成を計算しました。その結果、10年後には高齢者ばかりの集落になって、空き家もたくさん発生し、人口も半分になってしまうことがわかり、危機感を共有することができました。
- ▶ 行政が町内すべての集落について、人口・世帯数や高齢化の状況、公共交通や店舗の状況、農地の耕作放棄や空き家の状況、住民同士の絆の強さなどの情報を一覽で整理したところ、幾人かが危機感を持ち、議論の場につくようになりました。

ステップ② 集落の望ましい将来像を描いてみよう

ポイント

- 集落の将来像を描く際に、数字や個人名を用いるなどして、具体的に身近な問題であると共感してもらうことが重要です。厳しい状況ばかりが見えると意気消沈してしまうため、夢や希望が持て、住民同士が信頼し合える雰囲気づくりも重要です。
- 将来像は、決して夢物語ではなく、住民全員が努力して協力すれば実現可能な範囲で、みんなで考え出すことが大切です。

ヒント1 将来の希望を自由に話し合う雰囲気づくり

- ▶ 住民同士で集落の将来を話し合っても、数人が口を開くだけでしたが、「言い出した人が責任を押し付けられることはないので、どんどんアイデアを出そう」と言ったところ、様々なアイデアが出されました。

ヒント2 集落の資源を確認する

- ▶ 集落の今後について話し合う際、問題点や要望ばかりが寄せられ、前向きな話につながりませんでした。集落の資源や可能性を挙げてもらうようにしたところ、住民が資源の豊富さに気づき、活性化のアイデアが出されるようになりました。

ヒント3 高齢者から子ども、女性まで幅広い住民の意見を聞く

- ▶ 集落の資源として、若い住民が忘れかけている文化や言い伝えを整理するため、年配の方々に相談に行ったところ、集落の長い歴史を踏まえ、受け継いでいくべきことを教えていただきました。
- ▶ 住民ワークショップに子どもたちも参加してくれたので、集落の未来図を描いてもらいました。アイデアの中には、のんびりと農作業を営み、笑顔で手を振る高齢者の姿がありました。これを見て大人たちが集落の資源を認識し、この子たちのためにも頑張ろうと意を決しました。
- ▶ 住民の思いを正しく把握しようと、15歳以上の全住民に対してアンケートをとりました。世帯主に回答を依頼するだけでなく、世帯全員の意見を聞くことで、若者や女性の意見を把握でき、子育て支援や郷土料理の開発など、様々な人が参加してまちづくりを進めています。

ステップ③ コミュニティの維持・活性化に取り組んでみよう

ポイント

- コミュニティの維持・活性化には、外部の助けを借りながらも、継続的な活動にしていくため、住民が主体的に取り組むことが大切です。
- コミュニティの維持・活性化に向けて具体的な活動を進める段階では、仲間づくりや資金確保の面での工夫が重要です。

ヒント1 住民が主体となって取り組む雰囲気づくり

- ▶住民で必要な取組みを話し合うと、行政への要望ばかり出されるので、誰が実施すべきか考えてもらったところ、「住民で頑張ってみて、どうしても無理なことは行政に依頼しよう」という雰囲気に変わりました。

ヒント2 集落生活の維持・改善を図る

- ▶商店街の有志でNPOを立ち上げ、冠婚葬祭やイベントの開催、高齢者への宅配サービスなど、集落住民に対する生活支援が行われています。

ヒント3 地域資源を活用して集落の活性化に取り組む

- ▶集落独自の資源を活用し、特産品の開発、農家レストランの経営、農山漁村体験メニューの提供、都市住民との交流イベントなど、様々な活性化の取組みが行われています。

ヒント4 集落活動をサポートしてくれる仲間を広げたり、資金を調達する

- ▶集落で不足する担い手を補完するため、自治体やNPOに相談して、集落の活動を支援してくれる人材を派遣してもらうことがあります。
- ▶集落につながるのある都市住民との交流イベントを開催したり、インターネットなどを用いて情報発信すると、新しい仲間が見つかる可能性が高まります。
- ▶住民の会費や行政の補助金だけでは、なかなか活動が長続きしません。集落の活動を支える出資金を募る市民ファンドや、集落の資源を活用したビジネスで資金を確保するなど、様々な工夫がなされています。

第2部 暮らしの安心を支える「集落のかたち」について考えてみよう

1 集落の再生・再編の取組方法

集落の実態にあわせて、新たな「集落のかたち」を考えてみよう

- 暮らしの安心を支えてきたコミュニティの維持・活性化を図るため、従来の集落の枠組みにこだわらず、新たな「集落のかたち」を考えてみることも大切です。
- その手段には、大きく以下の3つの再生・再編の取組方法が考えられます。

集落の再生・再編のパターン

イメージ図

パターン① 集落間の連携

パターン①-1 集落間の相互扶助

集落を統合することなく、複数の集落が連携して、集落の共同活動を相互に助け合います。



パターン①-2 新たな広域的組織づくり

校区・公民館の単位等の一定の範囲において、複数の集落・団体が既往の組織を残しつつ、新たに組織を構築して地域づくりに取り組む形です。



パターン② 行政区等の再編

複数の集落をまとめて新たなコミュニティの枠組みを形成します。

(旧組織は、なくなることもあれば、組や班等として存在することもあります。)



パターン③ 集落の移転

集落内の相当数の住民がまとまって移転し、移転先のコミュニティに溶け込む形で生活を営みます。



- 住民同士で十分に話し合いながら、集落が直面する状況にあわせて、どのような集落の再生・再編に取り組むことが望ましいか、また、実行できるか考えてみるのが重要です。

小規模・高齢化で集落の共同活動を続けるのが難しくなってきた

パターン① 集落間の連携（集落間の相互扶助、新たな広域的組織づくり）

- ▷ 集落のまともりは維持した形で、他の集落と連携することで、道路や水路の管理、祭事など必要な共同活動を継続するものです。
- ▷ 複数集落で共同活動を行うことで新たな交流が生まれます。

集落で自治会や行政区の役員のなり手がいなくなってきた

パターン② 行政区等の再編

- ▷ 行政区等について、隣接する集落や大字などの広い範囲で統合することで、新たなコミュニティの枠組みを形成するものです。
- ▷ 集落の共同財産や氏神様、祭りなど、これまでの集落のまともりは、組や班などとして残す方法もあります。連携・統合したい機能や活動だけを新しい枠組みで実施することが可能です。
- ▷ 「区長や役員の担い手がいない」といった問題について、行政区等を統合することで、住民の負担が軽くなります。また、周辺の集落と情報交換する機会が増え、お互いに困ったことを相談しやすくなり、様々な共同活動を続けていくことにもつながります。

集落のつながりは維持したいけど、今のまま住み続けるのは難しくなってきた

パターン③ 集落の移転

- ▷ 自然災害の発生や集落の厳しい立地環境などにより、住民と行政が集落での生活が困難と判断した場合に、集落でまとまって移転するものです。
- ▷ 災害のおそれが少なく、通院や買い物などに便利な地域に移転することで、安全で安心な生活を営むことができます。

2 集落の再生・再編を考えるヒント

パターン①-1 集落間の相互扶助

■ 取組みの具体例

- 高齢者が過半を占める集落が多くある町で、素朴で温もりのある生活環境を維持・再生するため、複数集落による活動に対し、参加する集落数に応じて補助金を支給する制度を運用しています。
- この制度を活用し、同じ公民館の地区内にある集落が連携し、斜面地の景観整備や観光看板の設置が行われています。



ヒント1 集落同士が話し合うきっかけを見つける

- ▶区長会議や公民館運営会議など、既往の話し合いの場を活かして、各集落の課題や将来の不安について話し合いを進めることが有効です。

ヒント2 集落同士で連携しやすい活動から取り組む

- ▶校区内の集落や歴史的なつながりのある集落同士で話し合い、各集落で共通して困っている問題や必要と考える取組みなど、連携しやすい活動から取り組みました。連携に慣れ、互いに信頼が高まるにつれて、徐々に、農林業生産や福祉面での連携、行政区の統合などにもつながっています。



集落住民による話し合い



複数集落による共同活動の様子

パターン①-2 新たな広域的組織づくり

■ 取組みの具体例

- 市町村合併に向けた議論のなかで、昭和の合併以前の校区・公民館単位でまちづくりを展開していくべきとの意見が多かったことから、合併とともに校区内の全集落が参加する「地域自主組織」を設置しました。
- 市から資金や技術的な支援を受け、地域自主組織では、景観形成や環境整備、交流、農家レストランの経営などのコミュニティビジネスが活発に実施されています。



ヒント1 多様な主体を巻き込む

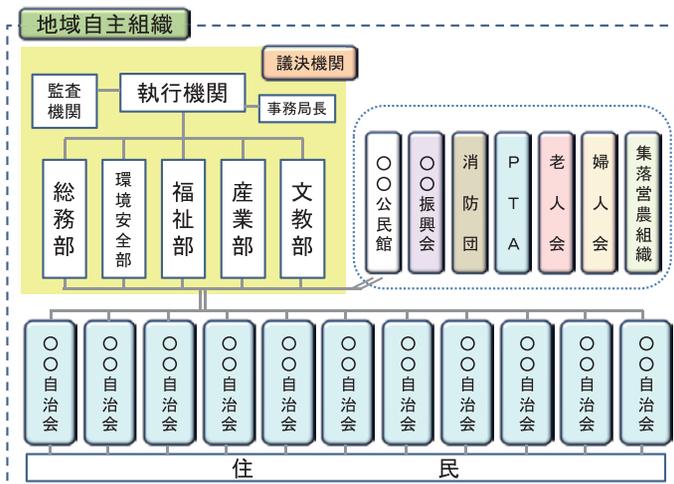
- ▶複数の集落から成る地区単位で、自治会やPTA、婦人会、消防団など各種団体により新たな自治組織をつくり、多様な能力・経験を持つ人材や団体の総力戦でまちづくりに取り組むことで、活性化が進んでいます。

ヒント2 住民や団体の思いや能力を把握し、適切な役割分担を図る

- ▶住民や多様な団体の有する能力を活かすことが有効です。そのためには、住民や団体の思いや能力を十分に把握した上で、これらの人材の適切な役割分担を図り、円滑な活動の実施体制を築くことが重要です。

ヒント3 多様な活動や組織の連携によって人材や資金を有効活用する

- ▶既に企業や団体が展開している特産品の開発・販売や宿泊業などの事業と連携して集落活性化の取組みを実施することで、相乗効果や新たな取組みの展開が期待できます。



自治会や各種団体が連携した
新たな自治組織の例



新たな自治組織による農家レストラン

パターン② 行政区等の再編

■ 取組みの具体例

- 世帯数が減少し、集落内で冠婚葬祭が実施困難になったことと、行政による行政区統合の推進のタイミングが一致し、同じ校区にある4つの行政区が統合しました。統合後の世帯数は40戸で、各世帯まで目が届く適切な規模となっています。
- 役員が12人から4人に減って住民の負担が軽くなり、人手不足で運営が難しくなっていた交流イベントも続けられるようになりました。共有林や共有財産、神社の管理は班（旧行政区）で行っています。
- 市町村合併を機に、経費節減や過疎・高齢化が進む集落の人材不足解消を目的として、旧町村の主導で行政区の統合を進めました。区長等で協議会を設けて住民の声を十分に聞くことで、統合に向けた手続きを円滑に行うことができました。



ヒント1 集落同士の交流を促進する

- ▶行政の支援も得ながら、同一の校区や生活圏にある集落、歴史的なつながりのある集落同士の交流を日頃から行い、互いの課題や魅力について情報を共有することが重要です。
- ▶行政区の統合を図る際、30歳代が中心となって検討・調整を進めたことで、これまで取り組んだことのない「行政区の統合」という難題に、前向きかつ最適な方法で臨むことができました。

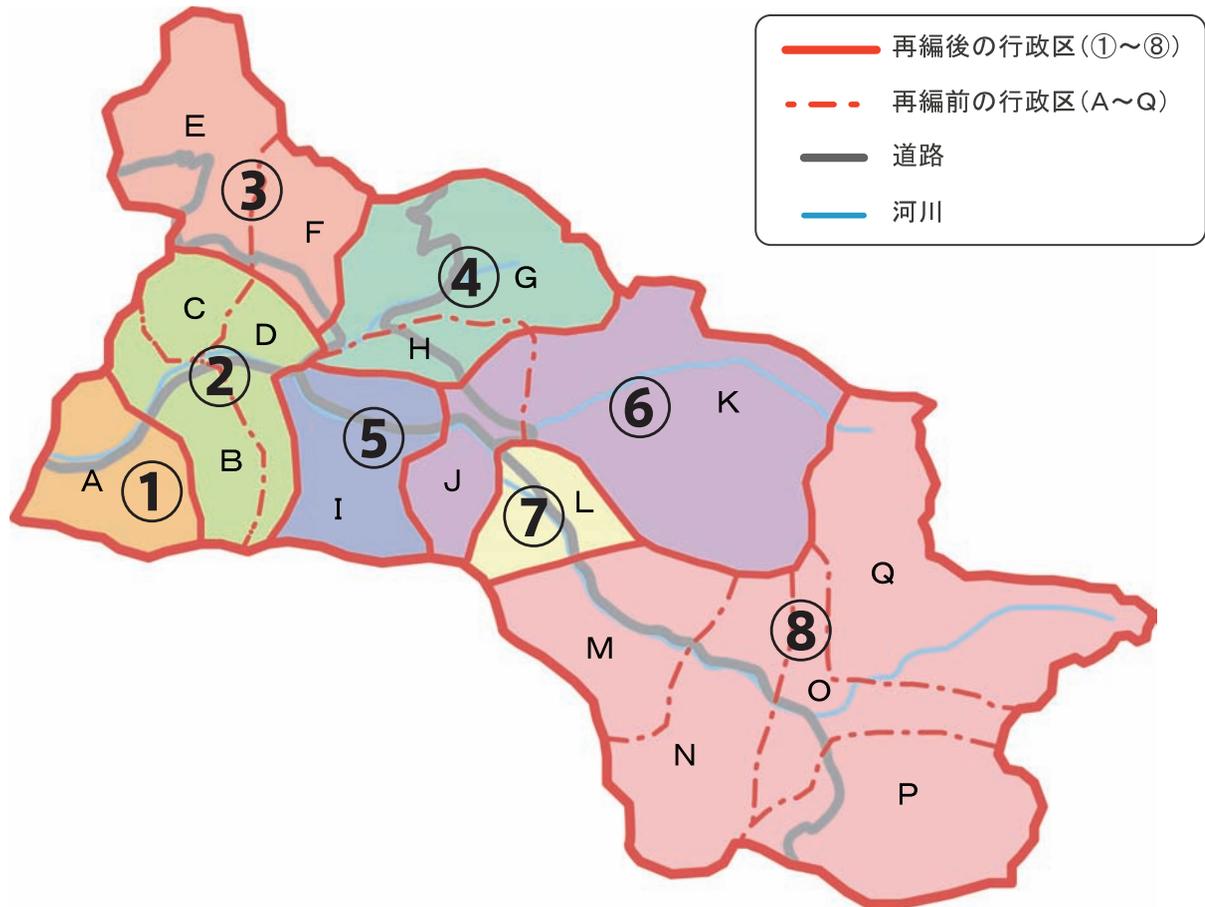
ヒント2 行政区等を再編する効果について理解を深める

- ▶行政区等を統合すると、区長などの役まわりが減って負担が軽くなるほか、まちづくりの資金をまとめた規模で使えることによって新しい事業を展開できるなど、様々な面での効果が考えられます。このような効果について集落同士の理解を深めることで、再編の検討を進めやすくなり、再編後のコミュニティづくりも促されます。
- ▶「集落の再編」と聞くと、集落の歴史文化や財産などが失われるのではないかと、抵抗を感じることもあると思われますが、行政区等の再編では、共有財産や氏神様の統合まで必要とするものではないことを、早い段階で住民全体が理解することが重要です。その上で、統合・連携をしない機能を明確にするとともに、集落同士で連携する機能について十分に話し合うことが大切です。

ヒント3

行政区等の再編をきっかけに集落活動を再生する

- ▶ 行政区を統合することによって、行政区の人口が増えました。そこで、以前の行政区のままでは存続をあきらめかけていた伝統芸能について、新たな行政区全体で続けられないか相談したところ、担い手を十分に確保することができ、今でも集落の大切なイベントになっています。
- ▶ 再編によって従前の集落に対して愛着が薄れる可能性があるため、従前の住民同士での日常的な交流の継続も大切です。



17 区の行政区を 8 区に統合した行政区再編の例



行政区の再編を行った集落での共同活動の様子

パターン③ 集落の移転

■ 取組みの具体例

- 震災の際、被災集落の復興手段の一つとして災害危険区域からの集団移転が実施されました。移転先では、新たなコミュニティの中で、降雪量が少なく、利便性の高い生活が営まれています。
- 災害によって林道の整備計画が白紙になったことを機に、役場に程近い地区に移転を決めました。移転を決めた9戸の資金・所得の状況に配慮し、宅地分譲と賃貸住宅、村営住宅の3種類が用意されたことで、円滑に移転することができました。
- 周辺での空港建設を機に、10世帯が役場近くの高台に移転しました。通院や買い物にも非常に便利になり、独立したコミュニティを形成していることから気の置けない住民同士で仲良く生活しています。
- 昭和40年代から世帯の転出が進み、残り4世帯となった際にまとまって移転しようと決心し、役場に相談しました。ふもとの集落に入れてもらう形で移転し、コミュニティに溶け込んで生活しています。なかには、元の集落へ通って農業される方もいます。



ヒント1 行政との連絡調整役を担うリーダーの役割が重要

- ▶ 住民全員の思いや希望をとりまとめ、行政とも様々な調整を繰り返し行う必要があることから、集落において調整役が必要となります。このような話し合いは、人材がいるうちにしておくことが望まれます。既に人口がほとんどいない場合には、複数で役割を分担したり、地域の名士などに関与してもらう形で、検討・調整を進めている例があります。

ヒント2 集落移転のメリットや負担についての情報を共有する

- ▶ 新しい住まいを確保し生活の場を変えるとといった経済的・精神的に大きな負担が生じるため、住民同士で情報を共有することが重要です。
- ▶ 住民の負担がネックとなるため、行政と負担軽減のあり方についてしっかりと認識を共有しておく必要があります。
- ▶ 住民が移転のメリットを具体的に把握することで、合意形成を円滑に進められるとともに、後に後悔することがなくなります。

ヒント3 移転先での新たな生活イメージをつかむ

- ▶ 移転先での生活をイメージしつつ、移転後もコミュニティを維持したり、移転先のコミュニティに溶け込む方法を検討しておくことが望まれます。

ヒント4 跡地の管理のあり方を考える

- ▶ 移転後の山林等の管理方法を、所有者や集落に残る住民と調整する必要があります。お墓や農地の管理のために道路等が必要であることから、行政とも道路等の管理のあり方について確認しておくことが重要です。
- ▶ 山林を中心に、早い段階から管理方法に関して話し合っておくと、後々、権利移転等を行う際に、多大な手間をかけることなく対応しやすくなります。
- ▶ 空き家については、不審者や不審火、ごみの投棄などの問題も生じるため、防災・防犯のための対策を考えておくことが重要です。
- ▶ 集落に長年受け継がれてきた伝統文化が失われることがないよう、記録集や映像記録に残して保存するなどの工夫も大切です。



集落跡地の状況



移転後の集落



集落跡地に建てられた石碑



移転後の集落

この冊子の内容は、講演、研修、会議等において
ご自由にお使いください。

(http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudokeikaku_tk3_000010.html)

この資料に関するお問い合わせ先



国土交通省国土政策局総合計画課

〒100-8918 東京都千代田区霞が関 2-1-2 (中央合同庁舎 2 号館)

電話 03-5253-8365、 FAX 03-5253-1570